
蒼い宝物・信じるココロ

月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い宝物・信じるココロ

【Nコード】

N4587A

【作者名】

月桜

【あらすじ】

いじめられている少女、満月。人気者の綾。そんな二人がある日出会い、満月は忘れていたことを少しずつ思い出していく・・・。

1 今、君といるとき（前書き）

少しファンタジーも含みます。

1 今、君といるとき

忘れていたこと、思い出したよ。あんたのおかげで。

机を見る。

落書きだ。バカ、とかブサイク、とか……。こんなことはもう慣れた。

私は一人ぼっち。いつでも……。助けなんてこない。私は、誰も信じない。もう何も……。信じない。

なのにあんたは……。こんなあたしに話かけてくれたね。

「同じ班だね。よろしく！」

その言葉がどんなにうれしかったことが……。

あんたは、あたしの……。神が授けた天使みたいだった。

「満月ちゃん!!」

と、いきなりあんたがあたしに乗りかかってくる。

「くつくるしい……。」

「あつ。ごめんごめん！」

と、首にかけた手はずす。

あたしの名前は橋本満月。肩にかかるくらいの黒髪のショートヘア。さきっぱのほうはパサパサだ。趣味は読書。自分で言うのもなんだが、頭だけはいいと思う。そして冷静だ。

「次、理科だよ！教室移動ね！」

こう言つて、さつきから話ってくる人、九条綾。黒髪のロングヘアーだ。天然で、ドズ。みてるとハラハラしてたまらない。こんな正反对な二人だけど、とても仲が良い。正反对なほど、人は仲良くなるものだ。

おたがい自分の知らないにかを持っていて、相手は自分のできることを持っていない。だから正反对の性格は、おたがいを求め、教えあう。そして仲良くなるのだ。

一人だったあたしを救い出してくれたのは、そんな正反对の性格のあんただったね。

おたがい、なんの知り合いでもなかった。同じクラスなのに気づかなかった。こんな人がいたなんてこと……。

たまたま、班が同じになった。

やっぱりだれも話しかけてくれなどしない。

あたりまえだ。

私と付き合えば、いじめの対象。通称‘闇っ子’になってしまう。

人は誰しも、自分優先だ。

私も正直、一人に慣れきっていた。心から……ためらいもなく私に話す人なんていないのだから……。

なのに……。あんたつてやつは……。

2 あたしの考え方

「同じ班だね！よろしく！」

正直、私もかなりびっくりした。

クラスの人たちの視線もこちらに向けられた。

この時のあたしは、たった一人だった。

何故、いじめが始まったのか？・・・それさえ思い出せない。

あたしは、1年前……。つまり2年生でこの学校に転校してきた。始めは、話しかけてくれた。でも……。そのときだけだった。

それから、あたしには友達もできなくて……。一人でいた。誰かがあたしに話しかけてくれるだろう……。それを期待してた。

しかし、この世界はそんなに甘くはなかった。

一人、孤立してしまったあたしは、闇っ子Ⅱいじめの対象となった。あたしが、その闇っ子にさえなつていれば他の子はいじめられない。

あたしだけが、あたしだけが犠牲になればいい。

別に、被害妄想してるわけでもない。

ほとんどの子はこういうだろう。

「勉強なんて、めんどくさい。学校にいつているのは友達がいるから。」

あたしの場合、学校にいく理由……。それは、勉強するため。

友達のいないあたしにとっては、当たり前なのかもしれないのだけれど。

まあ、イジメといつても

無視をされる・意見を聞いてくれない・少しでも間違えとめちやめちや笑われる・机の落書き・荷物がおちている・近くによつたら「うわっ」といわれる……

そのぐらい。
もう慣れた。

あたしはこうして生きていく。

生きていく……。

はずだった。

慣れたはずだった。

ナノニ……。

キンコンカーンコン……。

その音が、あたしの思考を破る。

「あつ、座らなくちゃね！」

みんな急いで席につく。

授業に集中できなかった。前にいる九条さんが気になって……。
気になって……。

あつという間に時間が過ぎていく……。

こんなこと、いままでなかったのにな……。

「なんかさつきは聞きそびれちゃってさ！」

授業が終わったあと、また話かけてくれた。

皆の目線が再度、こちらに向けられる。

「名前、教えてくれない？」

その目線を物ともせず、あんたは笑ってくれた。うれしくて……
うれしくて……。

それは、心からの言葉のようで……。

思わず泣き出してしまった。

「え、どうしたの？嫌なこと言った？」

「うつん……。違うの……。なんでもない……。」

なんでもないよ。うれしかったの。

ソノヒトコトガワタシヲカエテクレルコトニナルノダカラ……。

「私ね、九条綾っていうの。よろしく！！え〜と……。」

あんたは、私の名札を覗く。

涙をふき取って、笑顔を見せる。

「橋本……。満月……。」

「ふ〜ん……。満月ちゃん……。私ね、月が好きなんだあ〜……。これからも満月ちゃんでもいいよね？」

「うつん。」

あやふやな返事。こんなのでいいの？

いきなり話しかけて……。。

いまさら少し不安をもつ。でも、人に本気で笑顔をみせたのなんていつ以来だろう？

「じゃあ……。うつわっ！ああああ……。」

机につまずいて、顔面から転倒。

「大丈夫？」

「うつん……。私ってドジだから……。」

このとき、私はあんたを本気で信じていいと、勝手に思ったんだあ……。。

3 見つけた光

「昼休み」

「綾！遊ぼう！」

「うん！」

今日もなんともない。いつもの日々。

変わったことと言えば、橋本さん・・・ううん、満月ちゃんに話せたこと。

ずっと前から思ってた。

なんでいつも一人ぼっちなんだろう？

気づかなかった私もバカだったのかもしれない。

イジメラレテタンダ・・・。

「満月ちゃんも一緒に行かない？」

下を向いていた満月ちゃんは驚いた様子で、私をみる。

「え？いいの？」

「う・・・。」

うん、いいよ。と言いたかったのにいきなり小雪ちゃん（「私の親友」が口をはさむ。

「ちよつと待つて。橋本さん、綾と話あるから待つてて。」

小雪ちゃんは、私の手を強くひっぱった。

廊下を走って、誰もいない図工室に入った。

小雪ちゃんは、いきなり私を壁に叩きつける。

「なんでなのよ！？橋本さんに話しかけるなんてあんた、バカじゃないの！？」

怖い顔・・・。

「なんで・・・？」

「あんたの身を案じてるのよ・・・。」
顔を下にむけて悲しそうに言った。

「橋本さんに話しかけたら、あんたも闇っ子になっちゃうのよ?」

「小雪ちゃんは・・・満月ちゃんのこと・・・嫌い?」

え、というような顔をする。

「そうじゃないけど・・・。」

小雪ちゃんは小さな声で言った。

「じゃあ、橋本さん・・・満月ちゃんと友達になつて、私が闇っ子になるんじゃないかって心配してるんでしょ?」

「・・・。」

「そうなんだね・・・。私ね、イジメられたこの気持ち、よく分かるの。私もそうだったから・・・。」

「そうだったね。」

なつかしそうにいう。

「それを救ってくれたのは小雪ちゃんだっじゃない?私、すごく小雪ちゃんにアコがれた。小雪ちゃんみたいになりたかった。なのに・・・同じことをしてるのに・・・!なにがいけないの!?」
私は走り出した。

「・・・小雪ちゃんと同じことしてるのに、か。今は状況が違うよ・・・。もう2年たったじゃない・・・。今と昔じゃ全然ちがうんだよ・・・。綾・・・。」

私も、綾のほうへ走り出した。

「綾!!」

教室のドアをあける。

見えたのは、橋本さんと話している綾だった。

いままで怒っていたのがウソのように・・・。笑顔で・・・。

まあそれが、綾の得意技なんだけど・・・。

「綾・・・、ちよつといい?」

「あつ！小雪ちゃん！満月ちゃん、まってて。」

石本さん、また九条さんつれてどこかにいつちやた。

そのまま帰ってこないで、迷惑をかけるから。

いや、早く帰ってきて。

二つの気持ちが交差する。

急に光がみえた。

九条綾、という・・・。

闇に埋もれ、このままでいい。ずっと闇にいよう。迷惑をかけないために。

けど・・・。

光がみえた瞬間に、崩れ去ったあたしの信念。

アソコニキタイ・アタシモヒカリヲアビタイ

あたしも光をあびてもいいですか？

少し離れた場所で、私を止め

「あんたをもう一度あんなふうにさせたくなかったんだよ・・・。」

小雪ちゃんは言った。

「でも、あんたなら大丈夫だね？あんたが決めたことだもんね。」

「小雪ちゃん・・・。」

「私もさ、できる限りがんばってみるから！橋本さんを明るくしよう！ー！」

「うん！」

小雪ちゃん、あなたといるとなんでもできそうな気がする。だからこんなこともできるんだよ？ 私達の仲間に満月ちゃんをいれてあげよう。そして、私みたいに明るくなってくれたらなあ・・・。
・・・？ 待て。なんかどつかのドラマと似てる気が・・・。まあいつか。

ふたりは走り出した。教室へと

「満月ちゃん！！！」

ガラッと、ドアが開くと同時にそんな声がある。

「九条さん・・・。」

「だめ、だめ！」

九条さんが近づきながらいう。

「え？」

「綾って呼んでたっていった！」

「え・・・あつ。うん・・・あ・・・や・・・？」

九条さんは言った。笑って。

「それでいいの！」

久しぶりだあ・・・。呼び捨てって・・・。よく覚えておこう 綾、

あや、アヤ・・・私の始めての友達を・・・。忘れないように・・・。
ずっと・・・。

「橋本さん、私綾の友達の石本小雪っていうの。よろしく！」

「はい・・・。」

「なあゝんか綾と反応がちがうなあゝ。」

その後、3人で遊んで・・・。なんかじろじろ見られたけど、楽しかった・・・。うれしかった・・・。

忘れてたこと、思い出させてくれた。

笑顔・うれしいこと・友達を・・・。

アリガトウ・・・。
こんな私のために・・・。

楽しい、と感じれるとき

そして何日かたった。

私と友達になった綾ちゃんも小雪ちゃんもいじめられる様子はまったくくない。さすがは人気者……。 (綾ちゃんが人気者。かわいいからね)

遠足のことについて話し合う時間だった。

今回の目的地は博物館。いろんな体験ができ、自然もきれい。そんなところにいく。

班で、自由時間があり、その間なにをするか決めるのだ。

「はい！どこにいきたいですか！？」

あの……。班長あたしなんですが？綾さん？

「俺らは恐竜のところみたい！！橋本と一緒に嫌だからな……。」

「なに言ってるのよ！！私は、水晶のところが見たかったな……。」

「じゃあ……。」

小さい声で言った。

「うん？なに？」

綾ちゃんが、こっちを覗き込む。

「女子と男子分かれて行動すればいいんじゃないかな？あとから合流することにして……。」

「あ、いいね！！あんたたちもそれでいいよね？」

ふたりは顔を見合わせて

「ああ、いいぜ。」

班は女子二人、男子二人で構成されている。

男子たちはこう思ったに違いない。

マドンナ・九条さんとは一緒にいたい！！けど、橋本と一緒に嫌だと……。

だからまあいいと思ったはずだ・・・。

遠足かぁ・・・

なんか楽しみになってきた。

学校ってこんなに楽しいところだったんだぁ・・・。

「ただいま。」

「おかりなさい。」

おかあさんが、ご飯を作っていた。いいにおいだ。

自分の部屋にいこうと階段を上ろうとしたときだった。

「あんた、変わったね。」

「え？」

びつくりして振り返る。

「顔が輝いてる。」

「・・・あさって、遠足だからかな？」

考えていった。

「・・・いままでは、遠足でも下向いてたわよ？」

おかあさんは、顔をあげた。そして少し考えると

「おかあさん、あさってのお弁当腕を振るうからね！」

そういつて、腕をまくる。

あたしは、すこし微笑んで階段を上った。

そして、遠足の日・・・。

「1班、そろいました!!」

「えーとあとは・・・6班？」

「まだ、そろっていません・・・。」

あゝあ・・・まだかなぁ・・・。あと綾ちゃんだけなんですけど・・・。

「jかbなんーじゃふyんjー!!まだバスでてないよね!?!うわぁ!!」

みごと顔面からこけた。

「あ．．．。」

「大丈夫？」

「え？平気平気！！先生、6班そろいました！！？」

綾ちゃんは、息をきらしている。

「では、出発します！」

「綾ちゃん？どうして遅かったの？」

「え？いや、楽しみで寝れなくて！！！」

私は楽しもうと熟睡してたのですが．．．。

「一回、あそこに行ったことあるの！！満月ちゃんにみせたいものがあるの！！！」

そういつて、くすくすと笑う。

どんなことなんだろ？

バスに揺られること30分．．．。

目的地・博物館に到着。

ここだなにがおきるんだろ？

でも．．．でも．．．

イママデヨリモタノシイハズ．．．

綾ちゃんと一緒なら．．．。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587a/>

蒼い宝物・信じるココロ

2011年1月8日20時10分発行